

<p>サケ科魚類の新しい養殖対象種について－Ⅴ ～全雌異質三倍体ニジノスケの低酸素耐性について～</p> <p>加地奈々・小澤諒・三浦正之・岡崎巧</p> <p>ニジマス雌とマスノスケ偽雄を交配した全雌異質三倍体魚（全雌ニジノスケ 3n）の低酸素耐性について試験した。止水水環境下での半数横転時及び全数横転時の溶存酸素量は、全雌ニジノスケ 3n と全雌ニジマス 3n との間に差はなかったが、全雌マスノスケ 3n は他と比較して有意に高かった。また、半数横転及び全数横転に要する時間については、全雌ニジノスケ 3n と全雌ニジマス 3n の間には差が認められず、全雌マスノスケ 3n は他と比較して有意に高かった。以上のことから全雌ニジノスケ 3n は全雌ニジマス 3n とほぼ同等の低酸素耐性をもつことが明らかになった。</p>	<p>低魚粉飼料の有効性評価試験-II</p> <p>小澤 諒・三浦正之・岡崎 巧</p> <p>低魚粉区には魚粉 25%, チキンミール含量 10%の飼料を、対照区には魚粉含量 50 %の飼料をニジマスに給餌し、両区の飼料効率とコスト指数、糞量を算出した。試験開始 3 ヶ月後の飼料効率は低魚粉区で 79.9%, 対照区で 89.9 %となり、低魚粉飼料のコスト指数は 84.2 となった。また試験期間を通じて糞の沈殿量は低魚粉区の方が多かったが、乾燥重量は対照区の方が重かった。これらの結果は前年度の試験と同様の傾向にあり、低魚粉飼料を利用することにより飼料コストの削減が期待できることを示した。</p>
<p>西湖におけるクニマスの産卵環境－Ⅱ</p> <p>大浜秀規・青柳敏裕・芦澤晃彦・長谷川裕弥</p> <p>クニマス産卵場の礫地は、水深 27～31m にかけて 8 カ所が散在し、大きさは最大 7×9m, 最小 1×2m で、その全てで湧水の湧出が確認されたが、湧出量は少ないと考えられた。クニマスは、11 月中旬から 1 月下旬にかけて湖底礫地に来遊し、ピークは 12 月下旬から 1 月上旬にかけてであった。ウナギの卵食と思われる行動が 18 回観察され、クニマスの再生産に大きなダメージを与えていると考えられた。</p>	<p>県産アユ種苗の有効活用に関する研究 ～費用対効果に優れたアユ放流時期とサイズの検討～</p> <p>加地弘一</p> <p>小型に早期で放流したアユの釣獲状況や成長を通常放流魚、成魚放流魚と比較した。その結果、釣獲魚 1 尾のコストや単位時間あたりの釣獲尾数は小型早期放流魚が最も優れていた。また、小型早期放流魚の 1 ヶ月間の成長率は池中で継続飼育した通常放流魚より良好で、釣獲される大型魚の多くが小型早期放流魚であったことから成長面でも優れていた。以上より、早期小型放流は費用対効果に優れた方法である事が明らかになった。</p>
<p>ブラウントラウト完全駆除技術の開発</p> <p>大浜秀規・谷沢弘将・坪井潤一・長谷川功</p> <p>富士川水系金川でブラウントラウト完全駆除技術開発のため、電気ショッカーによる駆除作業を 2012～2016 年までに延べ 32 回・区実施した。駆除回数を 2014 年以降増加させた上中流区では、ブラウントラウト資源量が急減し、上流区では 2014 年に繁殖抑制に成功していた。ブラウントラウトの一部は電気ショッカーで除去しにくい場所にいると考えられた。</p>	<p>擬卵の改良によるカワウの繁殖抑制作業効率化</p> <p>谷沢弘将・小澤 諒</p> <p>カワウの擬卵置き換えによる繁殖抑制の効率化を図るため、簡易擬卵と視認性の高い擬卵の有用性を調査した。紙粘土を使用し作成した簡易擬卵は、対照区と同様の効果が得られ、従来に比べ作成時間短縮と経費削減が可能となった。橙色、灰色に染色した擬卵についても対照区と同様の効果が得られ、繁殖抑制作業を効率的に行えることが示唆された。</p>

西湖のヒメマスの春季沿岸回遊

青柳敏裕・谷沢弘将・長谷川裕弥

毎年春にみられる西湖のヒメマスの沿岸回遊について、出現時期や採食状況などから発生原因について検討した。例年4月から5月上旬にかけて出現する回遊集団（沿岸早期）、2015年5月下旬に出現した回遊集団（沿岸後期）とでは、外観や体サイズ、胃充満度や肥満率、年齢組成に差が認められ、沿岸早期は湖中の餌資源欠乏に伴う表層での索餌行動、沿岸後期はスモルト期の降海経路の探索行動と考えられた。